図 -7　研究所の思いを語る坂本典保所長

の根底を独自性のある製品を生み出す開発力が支える。

(2) プロピリスルフロン

スルホニルウレア系除草剤（SU 剤）は日本の水稲栽培の一発処理雑草防除の中心であるが，1990 年代後半より SU 剤抵抗性雑草が問題となった。2010 年に農薬登録された水稲用除草剤成分プロピリスルフロンは，イマゾスルフロン選抜の過程で合成された類縁体をリードに展開された化合物で，スルホニルウレア系化合物でありながら，既存の SU 剤抵抗性雑草にも除草効果を示すユニークな特徴を有する。現在，住友化学の除草剤のなかで，大きな地位を占め，韓国等アジアでも販売している。

SDGs（持続可能な開発のためのアジェンダ 2030）の取組み

SDGs は 2015 年 9 月の国連総会で決議された世界共通の目標で，科学技術による解決が求められる 17 のゴールが提案されている。農業・健康研では，そのうち目標 2「飢餓をゼロに」，3「すべての人に健康と福祉を」，9 の「産業と技術革新の基盤をつくろう」，11「住み続けられるまちづくりを」，13「気候変動に具体的な対策を」についての認識を，研究員自らが担当するテーマのなかに持ち，挑戦するという先駆的な取組みを進めている。

最後に，今回の取材を快く受け入れていただき，詳細な説明と資料の提供，研究所内部の案内などに丁重に対応していただいた研究所長の坂本典保氏，生物研究グループマネージャー（上席研究員）用貝広幸氏，研究技術室統括椋本藤夫氏，本社アグロ事業部マーケティング部除草・植調チーム主席部員叶治氏に心より感謝申し上げる。

注）同行者：（公財）日本植物調節剤研究協会野村卓史，仮谷道則

統計データから

平成 30 年産水田の作付状況（9 月 15 日現在）

農林水産省の 9 月 15 日現在の 30 年産水田の作付状況によると，水稲の作付面積は 159 万 2,000ha で，このうち，主食用米の作付見込面積は 138 万 6,000ha と，今年度から国による生産数量目標配分がなくなったなかではあるが，主食用米の大幅な増産傾向になく，おおむね前年と同水準となっている。

一方，輸出への関心の高まりから，輸出用米など新市場開拓用米は 29 年産の 1,000ha から 4,000ha に増えている。その一方，飼料用米は 26 年産から数量に応じて交付金が支払われる制度の導入によって，29 年産まで作付けが伸びていたが，29 年産の 9 万 2,000ha から 8 万 ha へと減少し，27 年産と同水準となっている。また，政府備蓄米も 29 年産の 3 万 5,000ha から 2 万 2,000ha に減少している。

その他はほぼ前年並みで，加工用米 5 万 1,000ha，米粉用米 5,000ha，WCS4 万 3,000ha，麦 9 万 7,000ha，大豆 8 万 8,000ha，その他（ソバ，ナタネ，飼料作物など）10 万 2,000ha となっている。

(K.O)

平成30年 産の水田における作付状況（平成30年 9 月15 日現在）　単位は万ha

	主食用米	加工用米	米粉用米	飼料用米	W CS	新市場開拓用米（輸出用）	備蓄米	麦	大豆	その他
27年産	140.6	4.7	0.4	8.0	3.8	0.2	4.5	9.9	8.7	10.0
28年産	138.1	5.1	0.3	9.1	4.1	0.1	4.0	9.9	8.9	10.2
29年産	137.0	5.2	0.5	9.2	4.3	0.1	3.5	9.8	9.0	10.2
30年産	138.6	5.1	0.5	8.0	4.3	0.4	2.2	9.7	8.8	10.2

注）加工用米及び米粉用米、飼料用米、W CS、新市場開発用米は取組計画の設定面積
備蓄用米は、地域農業再生協議会が把握した面積
その他は、飼料作物、そば、なたね等の面積
麦、大豆、その他（基幹作物のみ）は、地方農政局等が都道府県再生協議会に聞き取った面積